

韓国人の起源に関する中高生の意識と『国史』教科書との関係 The relationship between the consciousness of middle and high school students about the origin of the Korean and government-published textbook “National history”

金 相 勳 (稲田奈津子 訳・三上 喜孝 解説)

Kim, Sang-Hoon ; INADA, Natsuko (translated), MIKAMI, Yoshitaka (interpreted)

キーワード：韓国人の起源、国史教科書、姓氏、民族、檀君、高句麗、新羅

Key words: The origin of Korean, The government-published textbook “National history”,
surname, nation, DanGun, Goguryeo, Silla

目次

- I. はじめに
- II. アンケートの内容と結果
- III. 中学・高校の『国史』に描かれた檀君と古朝鮮
- IV. 中学・高校の『国史』に描かれた高句麗－渤海－高麗
- V. 韓国人の姓氏統計についての検討
- VI. おわりに

I. はじめに

韓国人の起源に関する従来の研究では、李基東が「現在の『韓国人』は、『韓国民族』と同義の単語として用いられるほど、世界的にも稀な単一民族である」とした上で、韓民族形成の真の出発点は、国家成立期である青銅器時代の濊貊族と韓族とにあり、彼らは古朝鮮をはじめ夫餘・辰国などの国家を建設し、後には三国の建国勢力にそのまま継承されたとした¹。李弘揆は「ヨーロッパ人と東洋人のY染色体の基本は同一で、遺伝学的な差異で人を分類することはできず、民族はひとつ

の文化を共有する人々の集団である。したがって韓民族とは、韓国朝鮮語を共通の文化要素として使用し、韓半島に集住する人々を指すものである」とした²。また李鮮馥は「韓民族の起源を論じるということは、文化的・言語的・歴史的な共同体として、自分たちをひとつの同質的な集団の成員と考える人々から構成された実体的な集団が、いつ、どのように形成されたのかを明らかにすることだと言える」と述べた³。また安承模は「実際に韓国人・韓民族がいつから形成されたのかを考古学的に探るというのは無理な話である。また韓民族の定義は何で、どこまでを韓民族の領域と見なすべきなのかも不明である」と指摘した⁴。以上の議論を通して、韓国人を定義し、その起源を探る作業は、決して容易ではないことが知られる。

ところで現在、大韓民国憲法第2条1項は「大韓民国の国民となる要件は法律で定められる」とし、国籍法が規定されている。これによれば、大韓民国の国民になる方法には出生による国籍取得、認知による国籍取得、帰

化による国籍取得の大きく3つの方法がある。しかしこうした法律規定ではなく、韓国で生活する人々が考える韓国人とは誰のことで、その起源はどのように認識されているのであろうか。韓国人の祖先についての人々の考えは歴史的事実に基づいているのであろうか。各人の姓氏とは関連するのであろうか。

こうした問題意識から、一般人文系高等学校の学生たちにアンケート調査を実施した。アンケート対象は、ソウル市麻浦区大興洞に所在する崇文高等学校の1年生282名と2年生285名で、調査日時は2009年3月16・17日の2日間であった（訳者注：韓国では3月から新学年となる）。アンケートの結果、78%近い学生が韓国人の祖先を檀君^{だんくん}と考えており、韓国に最も大きな影響を及ぼした古代国家は高句麗^{こうくり}であると答えた。こうした学生たちの考えは如何に形成されたのか、その過程を追跡するのが本稿の目的である。

本稿第Ⅱ章ではアンケート調査の内容と結果を紹介し、1年生と2年生の回答を比較しながら分析していく。ついで第Ⅲ章と第Ⅳ章では、アンケート調査の結果が中学・高校の国定教科書『国史』の影響を受けていることを検討してみたい。最後に第Ⅴ章では、韓国人の姓氏統計を通じて、現在韓国で生活する人々が古朝鮮^{こちょうせん}や高句麗とどれほどの関連性があるのかについて検討しようと思う。

Ⅱ. アンケートの内容と結果

アンケートは全7項目で、調査結果は次ページの通りである。

1・2年生を区別して調査した理由は、アンケートを実施した時点で1年生は高校の『国史』を未学習であり、中学課程の『国史』

により大きな影響を受けているであろうこと、一方で2年生は1年時に『国史』を学んだばかりで、高校課程の『国史』により大きな影響を受けているものと推測されるためである。その差異を確認しようとしたのである。

①からは96.5%の学生が韓国人を自認していることが知られる。20名(3.5%)の学生が自分は韓国人ではないとし、さらにそのうちの17名が⑤で韓国が単一民族国家であるとは思わないと答えた。韓国人ではないと答えた20名について、その理由にまでは調査が及ばなかった。参考までに、今回のアンケート調査対象外であった3年生には、母が中国籍である学生が1名、父母ともに中国籍である学生が1名在籍している。上記の20名の中にも、実際に韓国籍ではない学生がいる可能性、あるいは韓国籍であるものの両親のいずれかが外国籍であるために、自身も韓国人ではないと考える学生がいる可能性もありえよう⁵。

②では、韓国人と呼ばれるためには言語・国籍・皮膚の色の中でどの要素がもっとも重要であるのか、あるいはこうした外的な条件は重要ではないのかを問うたものである。1・2年生ともに、3つの条件の中で国籍が最も重要であるとし、ついで言語とした。韓国式の名前と皮膚の色が韓国人を規定すると答えた学生は17名(3.0%)で、国籍よりも皮膚の色が重要と考える学生もいることがわかる。3つの条件すべてを備えねばならないと答えたのは1年生で44名(15.6%)、2年生で56名(19.6%)であった。しかし1年生124名(44.0%)と2年生118名(41.4%)は、自身を韓国人であると思うすべての人が韓国人であると答えており、多くの学生は言語・国籍・皮膚の色よりも個人の所属意志がより重要で

①あなたは韓国人だと思いますか？

区 分	はい	いいえ
1年生	272 (96.5%)	10 (3.5%)
2年生	275 (96.5%)	10 (3.5%)
計	547 (96.5%)	20 (3.5%)

②韓国人とはどのような人を指すと思いますか？

区 分	韓国語を使う人	韓国国籍を持つ人	韓国国籍を持ち、韓国語を使い、皮膚の色が同じ人	自分が韓国人だと思うすべての人	国籍に関係なく、韓国名を持ち、皮膚の色が同じ人	その他・無回答
1年生	16(5.7%)	88(31.2%)	44(15.6%)	124(44.0%)	10(3.5%)	0(0.0%)
2年生	9(3.2%)	92(32.3%)	56(19.6%)	118(41.4%)	7(2.5%)	3(1.0%)
計	25(4.4%)	180(31.7%)	100(17.6%)	242(42.7%)	17(3.0%)	3(0.5%)

③韓国人の祖先は誰だと思いますか？

区 分	檀 君	朱 蒙	温 祚	朴赫居世	金 首 露	その他・無回答
1年生	222(78.7%)	25(8.9%)	4(1.4%)	15(5.3%)	9(3.2%)	7(2.5%)
2年生	220(77.2%)	27(9.5%)	3(1.1%)	13(4.6%)	13(4.6%)	9(3.0%)
計	442(78.0%)	52(9.2%)	7(1.2%)	28(4.9%)	22(3.9%)	16(2.8%)

④現在の韓国に最も大きな影響を及ぼした古代国家はどれだと思いますか？

区 分	古 朝 鮮	高 句 麗	百 濟	新 羅	伽 耶	その他・無回答
1年生	64(22.7%)	125(44.3%)	10(3.5%)	79(28.0%)	4(1.4%)	1(0.0%)
2年生	43(15.1%)	121(42.5%)	10(3.5%)	98(34.4%)	10(3.5%)	2(0.7%)
計	107(18.9%)	246(43.4%)	20(3.5%)	177(31.2%)	14(2.5%)	3(0.5%)

⑤韓国は単一民族国家だと思いますか？

区 分	はい	いいえ
1年生	160(56.7%)	122(43.3%)
2年生	133(46.7%)	152(53.3%)
計	293(51.7%)	274(48.3%)

⑥高句麗・百濟・新羅は同じ民族であったと思いますか？

区 分	はい	いいえ
1年生	208(73.8%)	74(26.2%)
2年生	194(68.1%)	91(31.9%)
計	402(70.9%)	165(29.1%)

⑦高句麗・百濟・新羅は、統一されてひとつの民族になったと思いますか？

区 分	はい	いいえ
1年生	158(56.0%)	124(44.0%)
2年生	172(60.4%)	113(39.6%)
計	330(58.2%)	237(41.8%)

あると考えていることがわかる。

③では、1年生222名(78.7%)と2年生220名(77.2%)が、韓国人の祖先を檀君であると答え、以下は朱蒙(訳者注:高句麗の始祖)―朴赫居世(訳者注:新羅の始祖)―金首露(訳者注:金官伽耶の始祖)―温祚(訳者注:百済の始祖)の順であった。8割近い学生が韓国人の祖先を檀君であると考えていることになるが、その理由については次章で集中的に検討したい。

④では、現在の韓国に最も大きな影響を及ぼした古代国家として、高句麗―新羅―古朝鮮―百済―伽耶の順で回答があった。学生たちは、檀君(訳者注:古朝鮮の建国者)を韓国人の祖先と考える一方で、影響を与えた古代国家は高句麗であるとしている。この設問では1・2年生の間に若干の差異を見出すことができ、2年生では古朝鮮が減り、新羅が相対的に増えている。この設問では、その影響が肯定的なものなのか否定的なものなのかを確認することはできなかったが、たとえば新羅の三国統一が及ぼした影響について、否定的にとらえる学生もいる⁶。

⑤の韓国が単一民族国家であると思うかという設問について、1年生では160名(56.7%)がそのように思うとし、そうではないとする122名(43.3%)よりも多かった。一方で2年生は、152名(53.3%)がそうではないとし、そのように思うと答えた133名(46.7%)よりも多く、本問でも1・2年生の間の差異を確認できる。

⑥では、高句麗・百済・新羅は同じ民族であったとするのが1年生208名(73.8%)、2年生194名(68.1%)で、そうではないとする1年生74名(26.2%)、2年生91名(31.9%)

よりも多かった。④⑤と同様に、本問でも1・2年生の間に若干の差異を確認できる。

⑦では、高句麗・百済・新羅は統一されてひとつの民族になったとするのが1年生158名(56.0%)、2年生172名(60.4%)で、そうではないとする1年生124名(44.0%)、2年生113名(39.6%)よりも多かった。本問は⑥と関連づけて考えねばならず、学生に多少の誤解を与えた可能性がある。つまり、三国は統一前から同じ民族であったのか、あるいは統一後にひとつの民族になったのか、という問いとして解釈された可能性もあるからである。⑦で三国が統一後にひとつの民族になったとの回答は1年生よりも2年生に多かったが、これは元来ひとつの民族ではなかったものが、統一によってひとつになったと考える2年生が多かったためと見ることができよう。

⑤⑥⑦から、高校で学んだ学生が徐々に認識を変化させ、韓国は単一民族国家ではなく高句麗・百済・新羅は同じ民族ではなかったが、新羅の三国統一によってひとつの民族となる基礎が形成されたと考えるようになったと見ることも可能ではなからうか。しかしその変化は極めて限定的であったことは、依然として70.9%の学生が三国を同じ民族と考えていることからわかる。

民族に関する学生たちのこうした意識は、中学・高校の『国史』教科書が、民族は種族・祖先・宗教・言語・領土という原始的紐帯を基礎にしているという、原初論的な民族概念をもとに叙述されているためと思われる⁷。中学校『国史』は「わが民族の起源と生活の基盤」という小題目で、高等学校『国史』は「わが民族の起源」という小題目で、それぞれ

次のような叙述をしている。

わが民族は、黄色の皮膚、黒髪などの身体的な特徴を持ち、人種的にはモンゴル人種に属し、語族としてはトルコ語・ツングース語・モンゴル語とともにアルタイ語族に属するものとみられる。したがってわが民族は、南方系よりも北方系との関連が大きいと言える。

早くから満州地域と韓半島を中心とする東北アジア地域に広く分布したわが民族は、新石器時代から青銅器時代にかけて徐々に民族の基礎を形成し、周辺の諸民族と交流しながら独特の文化を発展させた（中学校『国史』、10頁）⁸。

私たちの祖先は、おおよそ中国の遼寧省・吉林省を含む満州地域と韓半島を中心とした東北アジアに広く分布して暮らしていた。わが国に人が住むようになったのは旧石器時代からで、新石器時代から青銅器時代にかけて民族の基礎が形成された。……

わが民族は、人種の上では黄色人種に属し、言語学上ではアルタイ語族と近い関係にあるものとみられる。わが民族は古くからひとつの民族単位を形成し、農耕生活を基盤とした独自の文化を築いた（高等学校『国史』、19頁）⁹。

すなわち、わが民族は旧石器時代から現在に至るまで、韓半島周辺でひとつの種族が同じ言語を使いながら暮らしてきたと叙述しているのである。学生たちが韓国人は単一民族であると考えた原因が中学・高校の『国史』教科書にあることを、ある程度確認できよう。そこで、まずは古朝鮮の建国と檀君について、中学・高校の『国史』に記されている内容を

検討してみたい。

Ⅲ. 中学・高校の『国史』に描かれた檀君と古朝鮮

中学・高校の『国史』教科書ではともに、われわれの歴史の上で最初の国家は、檀君によって建国された古朝鮮であると叙述している。本章では、中学・高校の『国史』に描かれた檀君と古朝鮮に関する内容を詳しく見ることで、学生たちがなぜ韓国人の祖先を檀君であると考えたのかについて検討してみたい。

1. 中学校『国史』に描かれた檀君と古朝鮮

中学校『国史』の大単元「1. わが国の歴史のはじまり」、中単元「2. 国家の成立」に記される学習概要は、次の通りである。

私たちの歴史の上で最初の国家である古朝鮮は、青銅器文化を基盤として建てられた。古朝鮮は、紀元前4世紀頃に鉄器文化を受け入れて、さらに勢力を増した。古朝鮮の成立以後、満州と韓半島地域には、夫餘・高句麗・沃沮・東濊・三韓の国々が建てられた（中学校『国史』、17頁）。

このあとに檀君の肖像画が掲げられている。続く小単元「1. 古朝鮮建国の歴史的意義は？」に記される本文は、次の通りである。本文のあとには『三國遺事』（訳者注：13世紀に高麗の僧一然が新羅・高句麗・百済の3国の遺事を集めて撰述した歴史書）に登場する檀君神話が「読みもの資料」として紹介されている。

檀君の古朝鮮建国

青銅器文化が形成され、満州遼寧地方と韓半島西北地方には、族長（君長）が治める多くの部族が現れた。檀君はこうした部族を統合し、古朝鮮を建国した。

檀君の古朝鮮建国は、わが国の歴史が非常に古いことを示している。また檀君の建国事実と「弘益人間」の建国理念は、わが民族が困難に直面するたびに自矜心を呼び起こす原動力となった。

その他にも檀君の建国説話を通して、わが民族が初めて建国した時の状況を推測することができる。熊と虎が登場することからは、先史時代に特定動物を崇拝する信仰が形成され、その要素が反映していることが知られる。また雨・風・雲を主管する人物がいることから、わが民族最初の国家が農耕社会を背景に成立したことを推測することができる（中学校『国史』、18頁）。

上記のように中学校『国史』では、檀君がわが民族最初の国家である古朝鮮を建国したことを明示し、檀君の古朝鮮建国と「弘益人間」（訳者注：広く人間世界に利益を与えること）の建国理念が、わが民族の自矜心と原動力になったと述べている。また檀君神話を通じてわが民族が初めて建国した時の状況を推測できるとし、わが民族最初の国家が農耕社会を背景として成立したと叙述している。この項目を構成する7つのセンテンスのうち、3つに「わが民族」が、1つに「わが国」が入っている。現在、韓国では中学校までの義務教育を実施しており、韓国国民であれば、こうした内容から成る唯一の国定教科書『国史』を必ず学ぶことになる。この

教科書を通じて学習した学生たちが檀君と古朝鮮をどのように認識するようになるのか、十分に推測することができよう。

2. 高等学校『国史』に描かれた檀君と古朝鮮

つぎに高等学校『国史』の大単元「Ⅱ.先史時代の文化と国家の形成」、中単元「2. 国家の形成」、小単元「1. 古朝鮮と青銅器文化」に登場する本文の一部を挙げよう。

古朝鮮建国の事実を伝える檀君説話は、わが民族の始祖神話として広く知られている。檀君説話は長い歳月を経て伝承され、記録として残されたものである。その間に、ある要素は後代に新たに追加され、時には失われもした。

神話は、その時代の人々の関心が反映されたもので、歴史的な意味が込められている。これはあらゆる神話に共通する属性でもある。檀君の記録も同じく、青銅器時代の文化を背景とした古朝鮮の成立という、歴史的実事を反映している（高等学校『国史』、32～33頁）。

高等学校『国史』の本文では、古朝鮮がわが民族最初の国家であるという、直接的な言及はない。ただし、檀君説話はわが民族の始祖神話であると述べている。中学校『国史』より分量はかなり増えたが、「わが民族」という単語は1度登場するだけで、「わが国」は登場すらしめない。しかしこれは、わが民族と古朝鮮との関係を疑うとか、確信できないからというわけではなさそうだ。古朝鮮と檀君に関する記述に中学校『国史』より1頁多い4頁を割いており、また下線部に見られるように、檀君神話を単なる神話ではなく、古朝鮮

成立についての歴史的事実を示すものであると言及しているからである。これは学生たちに、檀君と古朝鮮の建国について、中学校『国史』よりもさらに大きな説得力を与えるものになろう。

また該当単元の内容を要約して提示する中単元「2. 国家の形成」導入部は、次のようになっている。

農耕の発達により剰余生産物が生まれ、青銅器が使用される中で、私有財産制度と階級が発生した。その結果、富と権力をもつ族長（君長）が出現した。族長は、勢力を伸ばして周辺地域を合わせ、ついには国家を築いた。この時期に成立したわが国最初の国家が、古朝鮮である。以後、古朝鮮は鉄器文化を受容しながら、中国と対決するほどに大きく発展した（高等学校『国史』、26頁）。

すなわち、本文にはないが、すでに単元導入部で、わが国最初の国家は古朝鮮であると明言しているのである。

以上のように高等学校『国史』では、中学校『国史』のように「わが民族」と檀君とを直接的に結びつけながら、くり返し強調することはしないものの、教科書に沿って授業を進めれば、韓半島最初の国家は古朝鮮とならざるを得ないのである。中学校ですでに古朝鮮がわが民族最初の国家であると学んだ学生たちは、当然そのように認識しているであろうし、高等学校課程ではこれをさらに深く学ぶように教科書が構成されている。また高等学校『国史』では神話の特性を紹介し、より論理的に檀君神話と古朝鮮建国との関連性を示している。檀君と古朝鮮の関係を学習する

にあたって、中学生には反復的言及が、高校生には理論的説明が、より効果的であろうである。また学生の立場からすれば、中学校『国史』を通してすでに学習した内容が、高等学校『国史』で重複して出てくることになる。このような教育課程と教科書体制であれば、学生たちがわが祖先は檀君であると答えるのも、十分に理解ができるのである。

さらに1点、確認しておくべき部分がある。次は高等学校『国史』の小題目「檀君と古朝鮮」の2段落目である。

族長社会でもっとも早く国家に発展したのは古朝鮮であった。『三国遺事』や『東国通鑑』の記録によると、檀君王儉が古朝鮮を建国したとする（紀元前2333）。檀君王儉は当時の支配者の称号であった（高等学校『国史』、2006年3月1日発行）

族長社会でもっとも早く国家に発展したのは古朝鮮であった。『三国遺事』や『東国通鑑』の記録によると、檀君王儉が古朝鮮を建国した（紀元前2333）。檀君王儉は当時の支配者の称号であった（高等学校『国史』、2007年3月1日発行）

筆者がこの部分で指摘したいのは、古朝鮮建国に関連する内容が教科書に取り入れられたか否かの問題ではない。すでに『国史』が国定制で発行されはじめた1974年第3次教育課程の段階から¹⁰、古朝鮮建国は檀君神話の枠組みで紹介されてきた。1981年に安浩相等が「国史教科書の内容是正要求に関する請願書」を国会に提出した後¹¹、1982年に作られた第4次教育課程の『国史』では、檀君王

俊が古朝鮮を建国したという『三国遺事』の記録を紹介し、これが歴史的事実である可能性について言及している。こうして2006年に至るまで古朝鮮の建国については、「檀君王俊が古朝鮮を建国したとする」と、『三国遺事』や『東国通鑑』（訳者注：朝鮮時代前期の15世紀に王命により編纂された歴史書）からの引用形式によって『国史』が叙述されてきた。しかし2007年の教科書からは、「檀君王俊が古朝鮮を建国した」とし、『三国遺事』や『東国通鑑』からの単純な引用によるのではなく、歴史的事実として確定的に語っているようにみえる。さらに建国年代としての紀元前2333年についても受け入れようとの意図がうかがえる。これは小題目「青銅器の普及」にある韓半島への青銅器伝来時期についての記述を通じて、確認することができる。

新石器時代に続き、韓半島では紀元前10世紀頃に、満州地域ではこれに先立つ紀元前15～13世紀頃に、青銅器時代が展開した（高等学校『国史』、2006、27頁）。

新石器時代末の紀元前2000年頃に、中国の遼寧や、ロシアのアムール川および沿海州地域から入ってきた粘土帯刻文土器文化は、先行する櫛齒文土器文化と約500年間共存した末に、次第に青銅器時代へと移行した。これが紀元前2000年頃から紀元前1500年頃のこと、韓半島の青銅器時代が本格化した（高等学校『国史』、2007、27頁）。

青銅器の使用は、世界の歴史からすれば普遍的に、国家形成のためのひとつの条件であると、高等学校『国史』では言及している

（18頁）。ところで、2006年までの高等学校『国史』では、韓半島には紀元前10世紀に青銅器が伝来したが、わが民族最初の国家である古朝鮮は紀元前2333年に建国されたとしていた。そうなると古朝鮮は、石器時代に国家が形成された、世界でも例を見ない国家ということになる。このように、檀君による古朝鮮建国という事実は認めつつも、紀元前2333年という建国年代は容認しなかったものが、2007年からは、ある程度これを容認する姿勢に変化したものと判断されよう。つまり学生たちに檀君による古朝鮮建国という事実のみならず、その建国年代までを事実として受け入れさせる構造が作られつつあると見ることができる。

3. 小学校の教科書に描かれた檀君と古朝鮮

中学・高校の『国史』を検討することで、檀君を韓国人の祖先と考える学生たちの考えには教科書の影響が大きいことを推測した。そこでさらに中学校入学前において、正規の教育課程で初めて習う檀君と古朝鮮が如何に叙述されているのかを確認するため、小学校の教科書について検討してみよう。

小学校の教育課程によれば、6年生1学期の『社会』教科書に、檀君と古朝鮮に関する内容が収録されている。初等学校『社会6-1』教科書の大単元1の目次は、次のようになっている¹²。

1. わたしたちの民族と国家の成立

1) ひとつにまとまった同胞

①初めて建てられた国、古朝鮮

②勢力を競い成長した3つの国

③三国を統一した新羅、高句麗を継承した渤海

教科書の目次だけ見ても「わたしたちの民族」あるいは「同胞」が初めて建てた国は、古朝鮮であることがわかる。大単元1の学習目標と言える「調べてみよう」には、次のように記されている。

ユミは、海外勤務となった父とともに、外国で数年間を暮らした。様々な国から来た子どもたちと親しく付き合いながらユミは、自分が韓国人であるということを、しばしば実感することになった。しかしユミは、わたしたちの国の歴史や文化について、外国人の友達から質問されても、自信を持って答えることができなかった。

6年生になって韓国に戻ってきたユミは、社会の時間にわたしたちの国の歴史を学ぶことになった。この授業を通じてユミは、わたしたちの祖先がどんな国々をつくりあげ、どんな文化を発展させてきたのかを調べてみることにした（初等学校『社会6-1』、3頁）。

上掲のように、初等学校『社会6-1』では、まず学生たちに韓国人であることを自覚させている。しかし、なぜ私は韓国人なのか、どういう人が韓国人と言えるのか、という点についての説明はない。小学校の教室で、この本で学習する学生の全員が、当然韓国人であるとの前提から出発しているのである。そして韓国人として、韓国人の祖先は誰で、彼らはどのような国をつくり、どんな文化を発展させてきたのか、わが国の歴史を学ばねばならないと述べている。アンケートの設問①で、大部分の学生が自らを韓国人であると考えて、その思考の出発点に、これが関連していると見ることもできよう。続けて中単元1

の学習目標は、次のようになっている。

わたしたちの同胞は、最初の国である古朝鮮を建て、高句麗・百済・新羅に続き、統一新羅と渤海を経て発展してきた。わたしたちの同胞が発展してきた過程を、歴史的人物と文化財を中心に詳しく見てみよう（初等学校『社会6-1』、4頁）。

初等学校『社会6-1』では、中学・高校の『国史』には出てこない「わたしたちの同胞」という単語が登場し、その最初の国が古朝鮮であると明言している。小単元1では旧石器・新石器・青銅器時代の話があり、その次に「最初の国家である古朝鮮はどんな国だったのか調べてみよう」として、『三国遺事』に記された檀君の建国説話を紹介している。続く本文は次の通りである。

わたしたちの祖先は、青銅器文化を基礎に、最初の国家である古朝鮮を建てた。上の文章は、古朝鮮の建国を伝える檀君説話である。ユミのクラスでは、檀君説話を読んで、古朝鮮について話し合ってみた。

『三国遺事』の檀君の建国説話について意見を交わしたユミのクラスの生徒たちは、様々な資料を調べて、古朝鮮とその後の国々について整理してみた。

《古朝鮮の建国》

国を建てた人：檀君王儉、建国の時期：紀元前2333年、都の場所：阿斯達、国を治める精神：広く人間を有益にするという「弘益人間」の精神（初等学校『社会6-1』、7～8頁）

初等学校『社会6-1』は、祖先たちが青

銅器文化を基礎に建てた最初の国家が、紀元前2333年に檀君王儉によって建国された古朝鮮であると整理している。教科書の内容に誤りがあるとは考えもしないすべての小学生にとって、わが民族とわが祖先、檀君と古朝鮮、その建国時期について、疑問を差し挟む余地はなかろう。このような教科書を通じて学習した小学生たちの韓国古代史に対する歴史意識は、中学・高校を経てより体系的に確立していくであろう。

また初等学校『社会6-1』で「わたしたちの同胞」「わたしたちの祖先」「わたしたちの民族」を同時に使用していることに注目せねばならない。編纂者たちは意図的にこうした単語を一緒に使用しているのか、あるいは学生たちにわかりやすく説明するために様々な単語を使用しているのか、確認することはできない。しかし、この教科書を通じて勉強した学生たちは、これらの単語を同義と捉え、区別せずに使用するようになるであろう。

以上、小・中・高の教科書内容を検討してきたが、こうした教科書を通じて学習した学生たちは、疑問の余地なく、檀君がわが民族最初の国家を建設し、檀君が韓国人の祖先であると考えようになるであろう。大部分の学生たちは教科書を常に正しいものと信じており、また現在、国史の授業の評価方式は、教科書の内容を正確に覚えて正解を選んだものが高得点を得るようになってきているからである。したがって韓国人の祖先が誰かという設問に檀君であると答えることが、教科書に沿って一生懸命勉強した証とされるであろう。韓国人の祖先を朱蒙・温祚・朴赫居世・金首露などと答えた学生は、きちんと勉強しなかったものと見なされるかも知れないのだ。

ちなみにアンケートの設問③では、韓国人の祖先は檀君であると答えた学生が78%に達した一方、設問⑤で韓国が単一民族国家であると答えた学生は51.7%に留まった。このことから、わが民族の祖先は檀君であると学んだものの、現在の韓国は檀君の後裔だけで形成されているわけではないと考える学生が、少なくとも48.3%に達すると理解することもできよう。これと関連して、高等学校『国史』には「百済は、漢江流域の土着勢力と、高句麗系統の流移民勢力との結合から成立したが(紀元前18) (47頁)、「新羅は、辰韓の小国のひとつである斯盧国から起こり、慶州地域の土着民集団と、流移民集団とが結合して建国された(紀元前57)。その後、東海岸から入ってきた昔脱解^{だっかい}集団が登場して、朴・昔・金の3姓が交代で王位を占めた」(47～48頁)、「高麗の国王は、元^{げん}の公主と結婚して元皇帝の駙馬^{ふば}(娘婿)となり、王室の呼称と格を駙馬国にふさわしいものに改めた」(74頁)といった叙述を見ることができる。ここから、学生たちが韓国を単一民族国家ではないと考える理由も、ある程度見出すことができよう。また現在、韓国には多様な民族が共存しており、こうした現状も学生たちの回答に影響を与えているであろう。「民族を構成する要素は絶えず変化し、民族という完成した実体があるわけではなく、絶えず作り続けられるものであるため、そうした観点を持たなければ、民族の起源を論議すること自体が無意味となるであろう」¹³という見解をふまれば、韓国人の祖先を檀君としながら、韓国は単一民族国家ではないとするアンケート結果も、理解することができるであろう。

IV. 中学・高校の『国史』に描かれた高句麗－渤海－高麗

学生たちは、なぜ高句麗が、現在の韓国に最も大きな影響を及ぼした古代国家であると考えてるのであろうか。これもまた中学・高校の『国史』による影響を考えないわけにはいかない。本章では、中学・高校の『国史』に描かれた古代国家に関する内容を検討することで、アンケート結果を解釈してみようと思う。

1. 中学校『国史』に描かれた高句麗－渤海－高麗

中学校『国史』の大単元「Ⅱ. 三国の成立と発展」、中単元「1. 三国の形成」と「2. 三国の発展」の部分で、高句麗・百済・新羅はほぼ同じ比重で扱われている。しかし「3. 新羅の三国統一」では、新羅の三国統一過程についての話に先立ち、高句麗の薩水大捷さつすいたいしやう（訳者注：612年に高句麗が隋の煬帝すい ようだいの侵攻を撃退した戦い）と安市城の戦い（訳者注：645年の安市城をめぐる高句麗と唐軍との攻防戦。唐軍は城を包囲するも陥落できずに退却した）が4頁にわたって比較的詳細に紹介されており、次のように締めくくられている。

隋・唐の侵入に立ち向かい高句麗が収めた勝利は、わが歴史上においても特記されるべきものである。当時、隋・唐は、高句麗を征服してアジアの覇権を奪おうとした。しかし高句麗がこれを退けたことにより、民族的な危機を克服することができた（中学校『国史』、60頁）。

すなわち高句麗は、アジアの覇権を奪おうとした強力な隋・唐を抑え、民族的危機を克

服したと記している。ここでいう民族的危機の克服とは、高句麗・百済・新羅をひとつの民族ととらえ、もし高句麗が隋・唐を抑えられなければ、わが民族である高句麗・百済・新羅は隋・唐に征服されたであろう、という意味のようである。高句麗は「わが民族の盾」であったわけである。高句麗が隋・唐に立ち向かい勝利した話を聞いた学生たちは、高句麗を非常に誇りに思うであろう。

ところで中学校『国史』は、高句麗が隋・唐を首尾よく抑えた話に続けて、羅・唐連合軍が百済と高句麗を滅亡させる、次のような内容があらわれる。

危機に直面した新羅は、まず高句麗に助力を求めようとしたが失敗し、唐に救援を求めた。きんしゆんじゆう金春秋は唐に渡って羅唐同盟を結び、百済と高句麗を滅亡させた後、大同江だいたうかう以北の土地を唐に譲り渡すとの密約を交わした（中学校『国史』、61頁）。

このように、高句麗は隋・唐と戦ってわが民族を危機から救ったが、新羅は唐と同盟を結んで高句麗と百済を滅亡させ、大同江以北の土地まで譲り渡すとの約束をしたと記している。教科書の記載順に沿って学習を進める学生であれば、高句麗と新羅に対してどのような思いを抱くようになるか、想像に余りある。

しかし、さらに注意深く見る必要があるのは、教科書が意図的に、高句麗－渤海－高麗とつながる歴史を描き出そうとしているのではなかろうかという点である。中学校『国史』の記載を詳しく見ると、そうした意図をある程度見て取ることができる。次は中学校『国史』に記された、だいそえい大祚榮の渤海建国に関する

部分である。

高句麗が滅亡した後、高句麗遺民たちは様々な系統に分散した。一部の貴族たちは唐に連行されもしたが、多くの遺民たちは唐に積極的に対抗し、唐の軍隊と安東都護府を遼東地方に追い出した。

折しも、唐の苛酷な収奪に悩まされていた契丹の酋長が反乱を起こすと、遼西地方にいた大祚榮はこれに乗り、高句麗人と靺鞨人を率いて遼河を渡り、東へ移動した。唐は靺鞨人部隊を撃破し、高句麗遺民を追いかけた。大祚榮は追撃してくる唐軍を撃破して、高句麗遺民と靺鞨人とを集め、吉林省の東牟山付近に都を定め、渤海を建てた（698）。

渤海の住民は、主に高句麗人と靺鞨人であった。支配層の中心は高句麗人であり、被支配層は主に靺鞨人であった。高句麗を継承した渤海は、日本に送った外交文書に渤海を高句麗と、渤海王を高句麗王と称し、高句麗継承意識を明らかにした。渤海の建国により私たちの歴史は、統一新羅と渤海とが両立する、南北国の形勢を成すことになった（中学校『国史』、73頁）。

上掲のように、大祚榮が高句麗遺民を集めて渤海を建国し、その支配層の中心は高句麗人であるとし、渤海の高句麗継承意識に言及することで、高句麗から渤海へとつながる歴史叙述をしているようである。古代史の叙述において渤海の比重が増大していることは、大単元Ⅲの題目が「統一新羅と渤海」と設定されており、割り当てられた誌面も統一新羅と渤海が各4頁に統一されていることから確認できる。また学習概要において、「新羅の

統一後、大同江から元山湾の以南は新羅が占め、高句麗の故地には渤海が建国され、南北国の形勢が成された」（68頁）と記し、新羅の三国統一以後の時代を南北国時代とすることを前提に、高句麗の故地に建国した渤海を、高句麗の継承者として描いている。さらに「建国後、渤海は高句麗を滅亡させた唐と新羅とに対し、敵対せざるを得なかった」（74頁）と記しているが、これは学生たちに、高句麗と渤海に対しては肯定的イメージを、新羅に対しては否定的認識を抱かせる素地になっているように思える。

続けて中学校『国史』の高麗についての大単元「Ⅳ. 高麗の成立と発展」、中単元「1. 高麗の発展」、小単元「1. 高麗の建国と後三国統一の歴史的意義は？」では、次のように記されている。

太祖は建国直後から北方進出を計画し、北進政策を持続的に推進した。国名もかつての高句麗を継承する意味で、高麗とした。太祖は高句麗の首都であった西京（平壤）を重視し、ここを北進政策の前進基地とした。太祖はここにしばしば立ち寄り、北方地域を巡視して、高句麗の領土を回復しようとする意欲を見せた。また高句麗の領土を占める契丹を無道の国と考え、敵対視した。こうした北進政策は、後に鴨緑江地域まで領土を拡張する原動力になった。……そして民族統合のため、多様な地方勢力を支配勢力として受け入れた。彼らの中には、統一新羅のみならず、かつての高句麗や百済出身の地方勢力も含まれていた。太祖は渤海の遺民たちまでも積極的に包摂し、彼らを高麗の支配勢力に参加させた（中学校『国史』、92頁）。

すなわち高麗は、国名から高句麗を継承する意味で付けられたとする。高句麗の広い領土に心残りを抱く学生たちに対し、高麗は高句麗領土の回復に意欲を持ち、そのために高句麗の首都であった西京を重視し、高句麗領土を占める契丹を敵対視したと述べてくれるのである。それだけではなく高麗は、統一新羅のみならず、かつての高句麗・百済の出身者や渤海遺民までも含む民族統合を成し遂げたとしている。こうした内容を持つ教科書を学んだ学生であれば、自然と高麗が高句麗を継承したと考えるようになるであろう。続けて高麗建国の意義を、次のように記している。

高麗は、高句麗・百済・新羅の多様な文化を融合し、開放性と多様性を特徴とした新しい民族文化の土台を用意した。

新羅の三国統一が民族統一の出発点だとすると、高麗の後三国統一は、かつての三国出身の多様な勢力や渤海人までもを包摂した、実質的な民族統一の完成であった(中学校『国史』、93頁)。

すなわち、高句麗・百済・新羅の文化を融合し、新しい民族文化の土台を用意したのも高麗であり、高句麗・百済・新羅・渤海人まで包容した、実質的な民族の統一を完成したのも高麗であると叙述している。

中学校『国史』では、新羅の三国統一を語りながらも、これはわが民族すべてを包括することのできなかつた部分的統一であり、三国のみならず高句麗を継承した渤海までも包容した高麗こそが、実質的な民族の統一を成し遂げたと述べているのである。したがって、中学校『国史』によって韓国古代史を学んだ

学生に対し、現在の韓国に最も大きな影響を与えた古代国家はと問えば、その結果は十分に予想することができるのである。

2. 高等学校『国史』に描かれた高句麗－渤海－高麗

高等学校『国史』も、中学校『国史』とほぼ似た構造で古代政治史を扱っている。大単元「Ⅲ. 統治構造と政治活動」、中単元「1. 古代の政治」では、三国の成立・発展・抗争について、高句麗・百済・新羅に誌面をほぼ均等に割り当てて記している。ただし、中学校『国史』が高句麗と隋・唐との戦争について比較的詳細に扱っていたのに対し、高等学校『国史』は半分程度に簡略化しており、「高句麗が隋・唐の侵入を防いだことは、高句麗を守っただけではなく、中国の韓半島侵略を阻止したという点でも、その意義は大きい」と締めくくっている。これは、「高句麗が民族的危機を克服した」とする中学校『国史』とは異なる部分と言えよう。また「新羅の三国統一」という小題目には、次のようにある。

唐が、新羅と連合して百済と高句麗を滅亡させたのは、結局、新羅を利用して韓半島全体を掌握しようという野心のためであった。……新羅は、高句麗と百済の遺民と連合し、唐と全面对決した。新羅は、高句麗復興運動勢力を後援する一方で、百済の地の支配権を掌握した(高等学校『国史』、55頁)。

すなわち、新羅も唐の野心のために利用されたのであり、高句麗・百済の遺民と連合して高句麗復興運動を後援したと述べている。これによって新羅に対する認識がある程度改

善されたためか、韓国に最も大きな影響を与えた古代国家が何であるかという設問④で「新羅」と答えた学生は、高等学校『国史』を学んだ2年生は34.4%であり、学んでいない1年生は28.0%であった。

高等学校『国史』にこうした変化があったにはあったのだが、依然として三国統一の意義を説明するに際しては、中学校『国史』と同じように「新羅の三国統一は、外勢の利用と、大同江以南の土地を占めるに留まったという限界性を持っていた」（55頁）と指摘している。これは、学生たちが新羅の三国統一に対して持つ否定的な認識を維持させる根拠となるであろう。

高等学校『国史』も、中学校『国史』と同様に、新羅の三国統一以後の時代を南北朝時代としている。高等学校『国史』では単元の題目を「南北朝時代の政治変化」としており、これは南の新羅と北の渤海という2国体制を前提とし、学生たちに渤海がわれわれの歴史であることを示すものである。また中学校『国史』に登場した「建国後、渤海は高句麗を滅亡させた唐と新羅とに対し、敵対せざるを得なかった」といった内容は消え、代わって渤海と新羅の間にあった「新羅道」という交通路について説明している（57頁）。

しかし高等学校『国史』でもやはり、高句麗から渤海へとつながる歴史叙述をしている。渤海の建国と発展に関して、次のようにある。

高句麗滅亡後、大同江以北と遼東地方の高句麗の地は安東都護府が支配していた。高句麗遺民は遼東地方を中心として、唐に抵抗し続けていた。

7世紀末に至り、唐の地方に対する統制力

が弱くなると、高句麗の將軍出身である大祚栄を中心とした高句麗遺民と靺鞨集団等は、戦争の被害をほとんど受けなかった満州東部地域に移動し、吉林省敦化市の東牟山麓に渤海を建てた（698）。渤海の建国により、南の新羅と北の渤海とが共存する、南北朝の形勢が成された。渤海は領域を拡大し、かつての高句麗領土の大部分を占めた。その領域には靺鞨族が多数居住してはいたものの、日本に送った国書に高麗または高麗国王という名称を使用した事実であるとか、文化の類似性から見て、渤海は高句麗を継承した国家であった。

大祚栄の後を継いだ武王^{ぶんおう}のときには領土拡張に力を注ぎ、東北方の様々な勢力を服属させて北満州一帯を掌握した。渤海の勢力拡大に伴って新羅は北方警戒を強化し、黒水部靺鞨も唐と連携しようとした。そこで渤海は、まず張文休^{ちやうぶんきゆう}の水軍によって唐の山東^{さんとう}地方を攻撃する一方、遼西地域で唐軍と激突した。また突厥^{とつげつ}・日本等と連携しながら唐や新羅を牽制し、東北アジアで勢力均衡を維持することができた。

続いて文王^{ぶんおう}のときには唐と親善関係を結び、唐の文物を受け入れて体制を整備し、新羅とも常設交通路を開設して対立関係を解消しようとした。渤海が首都を中京から上京に移したのは、こうした支配体制の整備を反映したものである。渤海はこうした発展を土台として、中国と対等な地位にあることを対外的に誇示するため、仁安・大興などの独自の年号を使用した。渤海は9世紀前半の宣王^{せんおう}のときに大部分の靺鞨族を服属させ、遼東地域に進出した。南へは新羅と国境を接するほどに広い領土を占め、地方制度も整備した。以後、全盛期を迎えた渤海を、中国人たちは「海東

の盛国」と呼んだ。

しかし10世紀初になると、部族を統一した契丹が東へ勢力を拡大してきた。渤海内部でも貴族たちの権力闘争が激化し、渤海の国力は大きく衰退し、ついに契丹の侵略を受けて滅亡した(926)(高等学校『国史』、56～57頁)。

このように高等学校『国史』は、高句麗將軍出身の大祚榮が高句麗遺民を集めて渤海を建国したと述べている。学生たちが心残りに思っていた領土面でも、渤海は高句麗のかつての領土の大部分を占めたとし、日本との外交文書には自ら高麗と称している。また文化的にも高句麗と類似した渤海は、高句麗の継承者であることを明言している。さらに渤海は高句麗のように中国と対等な地位を持ち、中国人たちが「海東の盛国」と呼ぶほどに発展していたと述べている。新羅についての叙述に若干の変化があったものの、このように描かれた渤海の歴史を勉強した学生であれば、渤海が高句麗を継承した国家であることを誇りに思うことであろう¹⁴。

高等学校『国史』の高麗建国に関する記述にも、中学校『国史』と同様に、高句麗の継承が語られている。次は「高麗の成立と民族の再統一」という題目下に掲載された内容の一部である。

弓裔きゆうえいを追放した後、臣下たちが推戴する形式をとって王位に登った王建おうけんは、高句麗の継承を掲げて国号を高麗とし(918)、自身の勢力根拠地であった松岳しょうがくに都を移した。……一方、渤海が契丹に滅亡させられると(926)、高句麗系遺民をはじめ多くの人々が高麗に亡命してきた。そこで太祖は、彼らを優遇して

民族の完全な統合を図った。これにより高麗は、後三国のみならず渤海の高句麗系遺民までも含んだ、民族の再統一を成し遂げた(高等学校『国史』、65頁)。

高等学校『国史』も中学校『国史』と同様に、高麗という国名には高句麗を継承するとの意味があるとしている。それだけではなく、高句麗が滅亡するや高句麗人たちが渤海を建国し、渤海が滅亡するや渤海を構成していた高句麗遺民たちが高麗に亡命してきたとして、太祖王建は彼らを優遇して民族の完全な統合と民族の再統一を成し遂げたとしている。すなわち新羅の統一は渤海を含まない部分的統一であったが、高麗は渤海までも含んだ完全な民族の統一を成し遂げたと述べているのである。

また「高麗による渤海遺民の包容」という追加説明では、「当時、高麗に來た渤海遺民の中には、官吏・將軍・學者・僧侶などが相当数いたが、太祖は彼らを適材適所に任命して後三国統一に活用した。特に渤海の王子である大光顯だいこうけんを優遇して、同族意識を明らかにした」と説明しながら、ふたたび高麗と渤海が同族意識を持っていたことを強調している。

さらに南北国の統治体制を説明する次の本文からは、教科書が意図的に、統一新羅に対しては否定的に、渤海に対しては肯定的に描こうとしているのではなからうかとの疑問が浮かぶ。

統一新羅の統治体制の変化は、中国式政治制度を受け入れ、強力な中央集権的専制国家として発展したものとと言える。しかし中央官府の長官と州の都督ととく、軍隊の將軍など、権力

の核心はいずれも中央真骨貴族しんこつが独占するという限界を持っていた。

渤海は王を中心とした中央集権的支配体制を整えた。中央の政治組織は三省と六部を根幹として編成された。政堂省の長官である大内相が国政を総括し、その下で左司政が忠・仁・義の三部を、右司政が智・礼・信の三部をそれぞれ分けて管轄する、二元的な統治体制を構成していた。唐の制度を受容しながらも、その名称と運営には渤海の独自性を維持した（高等学校『国史』、58頁）。

すなわち、新羅も渤海も中国の統治体制を受容して中央集権的支配体制を整えたが、新羅については真骨貴族（訳者注：新羅の身分制である骨品制において上位の王族階級）が権力を独占するという限界性を指摘するのに対し、渤海についてはその独自性を強調している。こうした叙述は学生たちに、外勢を利用して三国を統一した新羅に対する否定的な意識を与えるであろうし、高句麗を継承した渤海に対しては肯定的な認識を持たせることになる。

渤海が高句麗を継承したことは、文化史部分でもくり返される。次は大単元「Ⅵ. 民族文化の発達」、中単元「1. 古代の文化」、小単元「3. 古代人の痕跡と風情」に出てくる古墳と古墳壁画に関する記述の一部である。

渤海にも都を中心として多くの墓が残されている。その中でも貞恵公主墓は横穴石室墳で、抹角藻井式の天井構造が高句麗古墳とたいへん似通っている。ここから出土した石獅子像は非常に力強く躍動感がある。貞孝公主墓からは墓誌と壁画が発掘された。墓から出

土したこうした遺物は、渤海の高い文化水準を生き生きと示している（高等学校『国史』、262頁）。

渤海でも仏教が奨励されるにつれ、多くの仏像が製作された。上京と東京の寺址からは高句麗様式を継承したと思われる仏像も発掘されている（高等学校『国史』、265頁）。

このように、渤海の都にある貞恵公主墓が、抹角藻井式の天井構造を持つ横穴石室墳であり、高句麗古墳とたいへん似通っているという点と、高句麗様式を継承した仏像も発掘されていると指摘することで、渤海と高句麗の文化的関連性にも言及している。

V. 韓国人の姓氏統計についての検討

本章では、韓国人の姓氏¹⁵に関する統計から、現在の韓国人の祖先と檀君との関連性を検討してみようと思う。また現在の韓国人の姓氏と古代国家の主要な姓氏との関係から、韓国人の起源について考えてみたい。

学生たちが考えるように韓国人の祖先が檀君であり、現在の韓国に最も大きな影響を与えた古代国家が高句麗であるのならば、それらの痕跡を現在の韓国人の中にも直接的に見出せるのではなかろうか。そこで、各個人の祖先を示すと考えられる現在の韓国人の姓氏から検討をおこなってみたい。

李樹健によれば、姓氏が普及した後も無姓層として残った賤民層は、朝鮮後期（15・16世紀）まででも全人口の約40%前後を占めていた。しかし16世紀末からの時代的・社会的変動により、身分の向上とともに新たに姓を持つようになる階層が激増していった。特に

表1 姓氏別人口（単位：千万、%、%p）

姓氏	1985		2000		増 減			順 位	
		構成比		構成比		%	%p	1985	2000
全 国	40,420	100.0	45,985	100.0	5,565	13.8			
10大姓氏	26,053	64.5	29,456	64.1	3,403	13.1	△ 0.4		
金	8,785	21.7	9,926	21.6	1,141	13.0	△ 0.1	1	1
李	5,985	14.8	6,795	14.8	810	13.5	0.0	2	2
朴	3,436	8.5	3,895	8.5	459	13.4	0.0	3	3
崔	1,913	4.7	2,170	4.7	256	13.4	0.0	4	4
鄭	1,781	4.4	2,010	4.4	229	12.9	0.0	5	5
姜	958	2.4	1,044	2.3	86	9.0	△ 0.1	6	6
趙	877	2.2	985	2.1	108	12.3	△ 0.1	7	7
尹	834	2.1	949	2.1	114	13.7	0.0	8	8
張	810	2.0	919	2.0	109	13.5	0.0	9	9
林	673	1.7	763	1.7	90	13.4	0.0	10	10
20大姓氏	31,746	78.5	35,950	78.2	4,204	13.2	△ 0.3		
呉	620	1.5	707	1.5	87	14.1	0.0	13	11
韓	628	1.6	704	1.5	76	12.1	△ 0.1	11	12
申	621	1.5	698	1.5	77	12.4	0.0	12	13
徐	611	1.5	694	1.5	83	13.5	0.0	14	14
権	568	1.4	652	1.4	85	14.9	0.0	15	15
黄	564	1.4	644	1.4	80	14.2	0.0	16	16
安	556	1.4	638	1.4	81	14.6	0.0	18	17
宋	557	1.4	634	1.4	77	13.8	0.0	17	18
柳	509	1.3	603	1.3	94	18.5	0.0	19	19
洪	458	1.1	519	1.1	61	13.3	0.0	20	20
50大姓氏	38,267	94.7	43,405	94.4	5,138	13.4	△ 0.3		
100大姓氏	40,135	99.3	45,585	99.1	5,450	13.6	△ 0.2		

※千単位未満は四捨五入なので、合計と一致しない場合もある。

1894年の甲午改革（こうご記者注：こうそう高宗代に開化派の金弘集らがおこなった政治制度の近代化改革）を契機に従来の身分・階級が打破されたことは姓の一般化を促進させ、1909年に新しい民籍法が施行されると、すべての人が姓と本貫を持つよう法制化されたという¹⁶。

こうした事実を踏まえ、現在の韓国人の姓氏から韓国人の祖先を追跡し、古代国家との関連性を検討するという、手法自体に問題があると

する意見もあろう。しかし筆者は、かえって当時の人々の意識を反映するものとして意味があると考え、40%近い無姓層が姓を持つとする時、すでに消えて使われなくなった古代国家の姓氏を復活させたり、存在しない姓を作って使用したりはしないだろう。むしろ当時よく使用されていた姓氏や、身近の姓氏を利用した可能性が高いだろう。したがって40%近い無姓層に選ばれた姓氏こそが、その時代に影響力を

維持していた姓氏であった可能性が高いと考えられる。そこで現在の韓国で使用される主要姓氏は、歴史の中で生き残った韓国を作った人々の姓氏である可能性が高いとの仮定に立ち、検討を進めることにした。

2000年11月1日を基準に実施された人口住宅総調査で、姓氏および本貫を集計した資料が2003年1月に発表された¹⁷。この資料によれば2000年11月1日現在、韓国には286種の姓氏(帰化人除外)と4,179種の本貫があり、1985年以後の新規姓氏は無く、新規本貫は15種となっている。統計庁によれば、1985年と2000年の韓国の姓氏別人口は表1のとおりである¹⁸。

表1から、286種の姓氏のうち20大姓氏が全体の78.2%を占めており、全人口に対する構成比は過去15年間ほとんど変動していないことがわかる。そこで20大姓氏を韓国の主要姓氏とみなし、これらを基準に、いずれの古代国家の姓氏が現在の韓国に多く残されているのかを知ることができよう。

李樹健によれば『三国史記』と『唐書』以前の中国正史に記録されている三国の姓をみると、王室の姓を使う人が最も多く現れる。その他には、高句麗では解・乙・礼・松・穆・于・周・馬・孫・倉・董・芮・淵・明臨・乙支など10余種、百済では沙・燕・姦・解・真・国・木・昔の8大姓と王・張・司馬・首弥・古爾・黒齒など10余種、新羅では3姓(朴・昔・金)と6姓(李・崔・鄭・孫・裴・薛)および張・姚など10余種¹⁹を確認することができるという。

そこでまず高句麗王族を高氏とした場合(訳者注:李樹健著書〈96頁〉によれば、おおそ長寿王代(413-491)から中国への国書に高氏姓が使用されるようになった)、現在の韓国

には計435,839名(0.94%)の高氏がいるものと集計され、その本貫は全部で16種とされている。本貫別の人口は表2の通りである²⁰。

表2 高氏本貫別人口

	本貫	世帯数	人口	比率
1	江陵	1,583	4,626	1.1%
2	江華	357	1,130	0.3%
3	開城	3,710	11,833	2.7%
4	慶州	690	2,148	0.5%
5	高靈	366	1,172	0.3%
6	固城	382	1,228	0.3%
7	高興	505	1,698	0.4%
8	安東	520	1,614	0.4%
9	長澤	1,157	3,710	0.9%
10	長興	19,316	61,626	14.1%
11	全州	307	1,001	0.2%
12	済州	100,954	325,950	74.8%
13	晋州	361	1,035	0.2%
14	昌平	550	1,811	0.4%
15	清州	492	1,578	0.4%
16	横城	1,289	4,277	1.0%
	計		235,839	

表2にあるように、16の高氏本貫のうち74.8%が済州高氏である。済州高氏は済州三姓穴神話(訳者注:国造り3神の神話で、高・夫・良3氏の祖とされる)を持ち、高乙那を始祖とするもので、朱蒙とは何の関係もない。高乙那の45世孫である末老(済州)、末老の曾孫である恭益(清州)、同じく末老の曾孫である令臣(開城)、末老の10世孫である福林(長興)、末老の後裔である宗弼(延安)、末老の16世孫である応涉(安東)といった人物を中始祖とするなど、後に15の本貫に分かれたが、同じ血統を継ぐ子孫であるとして再び合本し²¹、高乙那を始祖として本貫を済州にし、1974年に済州高氏中央宗門会を作った²²。し

表3 歴史書に現れる高句麗人姓氏²⁴と現在の人口

	姓氏	世帯数	人口	本 貫	系 統	比 率
1	解	—	—			
2	乙	—	—			
3	礼	—	—			
4	松	1,493	4,737	和順		0.01%
5	穆	—	—			
6	于	1,057	3,359	木川（天安）	于邦寧—高麗	0.01%
7	周	12,018	38,778	慶州、綾州、尚州、天安、 鉄原、草溪	6本貫とも同本、 唐朝の周頤が新羅 に帰化	0.08%
8	馬	11,076	35,096	開城、義城 木川、長興：同本、始祖は 馬浣。殷人が朝鮮に移住、 馬黎は百済建国勢力	殷 古朝鮮	0.08%
9	孫	129,780	415,182	京畿、慶州、光州、求礼、 金海、羅州、南原、達城、 密陽、宝城、安東（一直）、昌 寧、清州、平海	安東（一直） —中国の孫凝 13本貫—新羅	0.90%
10	倉	48	144			0.00%
11	董	1,731	5,564	広川—前漢の董仲舒の43 世孫・董承宣、高麗末に入 り、朝鮮開国に功を立てる	中国、朝鮮	0.01%
12	芮	3,968	12,655	宜寧、宜興、清道—単一本。 中国から来たが、その時期 は不明。始祖は芮楽全。高 麗	中国、高麗	0.03%
13	淵	—	—			
14	明臨	—	—			
15	乙支	—	—			
	計	161,117	515,515			1.12%

たがって現在の韓国に残る高氏は、大部分が
済州高氏の子孫であると見て問題なかろう。

王族以外で歴史書に登場する高句麗の姓氏は、
現在どの程度残っているであろうか。表3は古
代の歴史書に高句麗人として出てくる姓氏につ
いて、現在の人口を示したものである²³。

表3に掲げた15種の高句麗姓氏のうち、現
在まで使用されている姓氏は8種である。た

だし歴史書とは漢字表記が異なるが、海（訳
者注：解と同音）は322名、父（訳者注：礼
と同音）は1名、睦（訳者注：穆と同音）は
8,191名、連（訳者注：淵と同音）は532名、
延（訳者注：淵と同音）は28,447名、燕（訳
者注：淵と同音）は3,549名が存在する。乙・
明臨・乙支は存在しない。歴史書に出てくる
15姓氏のうち、現在使用されている8姓氏を

すべて高句麗系統と認めたととしても、全体人口の1.12%にしかない。しかも最も多い孫氏の場合、14本貫のうちの13は新羅6村長の1人である大樹村村長の俱礼馬を、残る安東（一直）孫氏は中国宋朝から来た孫凝を始祖としている。于氏は于邦寧を始祖とする高麗系統で、周氏は6本貫ともに同本で、唐朝の周頤が新羅へ帰化したものである。馬氏は殷人として朝鮮に移住した馬浣を始祖とし、董氏は董仲舒を始祖とし、朝鮮開国功臣である董承宣を中始祖とする。芮氏は中国と高麗の系統に分類することができる。したがって高句麗人を始祖とする姓氏は、ほとんど存在しないものと見てよかろう。

一方、新羅の姓氏である朴・昔・金・李・崔・鄭・孫・裴・薛・張・姚をすべて合わせると、全体人口の57.8%を占める。もちろん韓国の姓氏の中で最も高い比率を占める金海金氏を新羅系統に含めた数値である。金海金氏の始祖である金首露が建国した金官伽耶は、532年に新羅に併合されて新羅の真骨貴族としてその家門を守ったため、新羅系に含めてもよかろうと考えたためである²⁵。表4は新羅系統の姓氏別人口数である²⁶。これによれば韓国人10大姓氏のうち1位から5位までが、すべて新羅系統であることがわかる。

もちろん表4の11姓氏も、本貫別に見れば新羅に端を発しないものもあり得よう。そこで姓氏だけでなく本貫によって、その始祖・系統を検討する必要があるだろう。人口100万以上の姓氏本貫は5種あり、その人口比率は28.1%、人口50万以上の姓氏本貫は13種、その人口比率は40.9%となっており、韓国人の本貫4,179種のうち、人口の多い上位20位で全体人口の47.6%を占めている。表5は、姓

表4 新羅系統の姓氏人口

区分	姓氏	世帯数	人口	比率
	全国	14,326,224	45,985,289	
1	金	3,102,537	9,925,949	21.6%
2	李	2,113,007	6,794,637	14.8%
3	朴	1,215,918	3,895,121	8.5%
4	崔	676,773	2,169,704	4.7%
5	鄭	626,265	2,010,117	4.4%
6	張	287,195	919,339	2.0%
7	孫	129,780	415,182	0.9%
8	裴	115,900	372,064	0.8%
9	石	14,282	46,006	0.1%
10	薛	11,931	38,766	0.1%
11	姚	63	198	0.0004%
	計	8,293,651	26,587,143	57.8%

氏本貫別人口を示したものである²⁷。

この統計をもとに20大姓氏本貫の始祖・系統を整理すると、表6のようになる。

このように上位6種はいずれも新羅系統と判断してよかろう。少なく見積もっても11本貫13,019千名28.4%が、金海金氏と達城徐氏を含めれば17,573千名38.1%が、新羅系統であることがわかる。20大本貫のうち高句麗系統は晋州姜氏が唯一で、清州韓氏と達城徐氏が箕子朝鮮から出たとする。そのほか坡平尹氏・仁同張氏・平山申氏・順興安氏は高麗系統と分類されるが、高麗建国功臣である幸達と申崇謙は新羅代に誕生した人物である。仁同張氏は知られる限り最も古い世代を中国から来た張金用・張桂とするが、その真偽は不明としている²⁸。

本貫を基準に各姓氏の始祖と系統を検討した結果も、姓氏だけを基準に検討した結果と大きくは変わらない。すなわち286姓氏中の上位5姓氏、4,179本貫中の上位6本貫は、い

表5 姓氏本貫別人口（單位：千名、%、%p）

姓氏本貫	1985		2000		增 減			順 位	
		構成比		構成比		%	%p	1985	2000
全 国 計	40,420	100.0	45,985	100.0	5,565	13.8	—		
20大姓氏本貫	19,736	48.8	21,877	47.6	2,141	10.8	△ 1.2		
100万名以上	11,592	28.7	12,928	28.1	1,336	11.5	△ 0.6		
50万名以上	16,927	41.9	18,799	40.9	1,872	11.1	△ 1.0		
金海金氏	3,767	9.3	4,125	9.0	358	9.5	△ 0.3	1	1
密陽朴氏	2,705	6.7	3,031	6.6	327	12.1	△ 0.1	2	2
全州李氏	2,380	5.9	2,610	5.7	230	9.7	△ 0.2	3	3
慶州金氏	1,523	3.8	1,737	3.8	213	14.0	0.0	4	4
慶州李氏	1,217	3.0	1,425	3.1	208	17.1	0.1	5	5
慶州崔氏	876	2.2	977	2.1	100	11.4	△ 0.1	7	6
晉州姜氏	921	2.3	967	2.1	26	2.7	△ 0.2	6	7
光山金氏	751	1.9	837	1.8	86	11.5	△ 0.1	8	8
坡平尹氏	647	1.6	714	1.6	67	10.4	0.0	9	9
清州韓氏	598	1.5	643	1.4	45	7.6	△ 0.1	10	10
安東權氏	559	1.4	629	1.4	70	12.6	0.0	11	11
仁同張氏	539	1.3	591	1.3	53	9.7	0.0	12	12
金寧金氏	424	1.0	513	1.1	89	20.9	0.1	14	13
平山申氏	460	1.1	497	1.1	37	8.0	0.0	13	14
順興安氏	418	1.0	469	1.0	51	12.3	0.0	15	15
東萊鄭氏	415	1.0	442	1.0	28	6.6	0.0	16	16
達城徐氏	398	1.0	429	0.9	31	7.8	△ 0.1	17	17
安東（旧）金氏	398	1.0	425	0.9	27	6.8	△ 0.1	18	18
海州吳氏	377	0.9	423	0.9	46	12.1	0.0	20	19
全州崔氏	343	0.8	393	0.9	50	14.5	0.1	22	20

表6 20大姓氏本貫の始祖および系統の分類

順位	姓 氏	始 祖	系 統
1	金海金氏	金首露	伽耶、新羅
2	密陽朴氏	朴赫居世	新羅
3	全州李氏	司空李翰	新羅
4	慶州金氏	金閔智	新羅
5	慶州李氏	閔川楊山村の謁平	新羅
6	慶州崔氏	突山高墟村の蘇伐都利	新羅
7	晋州姜氏	姜以式	高句麗
8	光山金氏	神武王第3男子の興光	新羅
9	坡平尹氏	莘達（真聖王7年983年出生）	高麗、開国功臣
10	清州韓氏	準王の3子のうちの韓蘭	箕子朝鮮
11	安東権氏	味鄒王22・23世孫、金閔智29・30世孫の太師公権幸	新羅
12	仁同張氏	張金用、張桂	高麗
13	金寧金氏	敬順王第4男子、金殷説9世孫の金時興	新羅
14	平山申氏	申崇謙	高麗、開国功臣
15	順興安氏	安子美	高麗
16	東萊鄭氏	觜山珍支村の智伯虎	新羅
17	達城徐氏	箕子朝鮮最後の王・箕準の後裔である新羅の阿干神逸	箕子朝鮮、新羅
18	安東(旧)金氏	金閔智	新羅
19	海州呉氏	高麗成宗代の呉仁裕、中国から渡来	中国、高麗
20	全州崔氏	突山高墟村の蘇伐都利	新羅

いずれも新羅系統に分類することができる。4,179本貫すべてを調査することはできなかったが、その相当数は新羅系統ではなからうか。というのも、新羅の3王姓および6村長姓から発生したものの、後代に姓氏を改めた家も存在するからである。その好例が本貫別人口数で11位を占める安東権氏である。安東権氏は、^{きん あつち}金閔智（訳者注：慶州金氏の始祖

で、金の小箱から誕生したとの神話を持つ）と味鄒王（訳者注：新羅13代王、閔智の6代孫）の後裔である権幸が始祖で、慶州金氏から分かれたことが知られている。

韓国における氏族制の出現が新羅と密接な関係にあることは、宋俊浩によっても指摘されている。宋俊浩は、「韓国において氏族制の出現を促進した契機のひとつは新羅王京の王

孫および貴族たちの地方分散にあり、そうした意味で統一新羅の出現は氏族制拡散のひとつの契機になった。新羅の滅亡は、その拡散をふたたび促進する契機になった」とした²⁹。また朴・金の両姓や李・崔・孫・鄭・裴・薛などの新羅貴族姓の他にも、高麗建国前から全国各地に有力な望族がおり、その中には新羅系が多かったものと推測されるとした³⁰。

表7 古朝鮮系統の人口

区分		世帯数	人口	比率
1	清州韓氏	199,642	642,992	1.40%
2	幸州奇氏	6,660	21,536	0.05%
	幸州箕氏	684	2,294	0.00%
3	太原鮮于氏	1,103	3,560	0.01%
4	利川徐氏	53,407	172,072	0.37%
	達城徐氏	132,270	429,353	0.93%
	計	393,766	1,271,807	2.77%

そのほか、現在までに確認された古朝鮮系統の姓氏は³¹、表7の如く全人口の2.77%程度である³²。しかし彼らも檀君の後裔ではない。また扶餘隆ふよりゆうの後裔とされる扶餘徐氏³³の人口は14,312名となっている。百済系統の姓氏があることも確認できるが、その数は全体人口に対して極少数に留まるようである。

結局、主要姓氏本貫の中では晋州姜氏のみが高句麗系統と見られるものの、全体人口の2.1%に過ぎず、歴史書に登場する高句麗15姓氏の割合も1%に満たないのである。檀君の姓氏を知る術はないが、現在では檀君を始祖として祀る家も無いようであり³⁴、百済王族系統の姓氏も存在するものの、その割合は大きくない。一方で、主要姓氏のうちの相当数が新羅系統であることが確認される。彼らが本

に新羅人の後裔か否かについては論じないが、現在の韓国で彼らが多くの割合を占めている原因については、考えてみる必要がある。その際、新羅が高句麗と百済を征服したという歴史的事実から考察を始める必要がある³⁵。

アンケートに答えた崇文高生は、自らの姓氏とは無関係に韓国人の始祖は檀君であると考え、高句麗が現在の韓国に最も大きな影響を与えたとした。姓氏から知られる起源とは別の歴史意識を持っていることが確認されたが、こうした学生たちの意識に最も大きな影響を与えたのは、小・中・高の歴史教科書であると考えられるのである³⁶。

VI. おわりに

アンケート調査により、高校生の78%が韓国人の祖先を檀君と考え、韓国に最も大きな影響を与えた古代国家は高句麗であると考えていることが判明した。しかし統計庁が発表した統計資料によれば、現在の韓国において古朝鮮や高句麗の系統に属する姓氏は少数に過ぎない。一方で、10大姓氏のうちの上位5姓氏、20大本貫のうち11（または13）本貫が、新羅と関連することが知られる。本稿では、自身の姓氏起源とは無関係に上記のような回答をおこなった学生たちの考えが、中・高の国定教科書『国史』に基づいていることを指摘した。また初等学校『社会6-1』の検討から、13歳の小学校6年生は「わたしたちの民族」「わたしたちの同胞」の先祖は檀君であって、われわれは檀君の後裔であると学び、さらに中学・高校での学習を経ることで、これを疑う余地のない事実として受け入れるようになるという過程を確認した。

また中・高の『国史』が高句麗-渤海-高

麗とつながる歴史叙述構成を持っていることも指摘した。教科書では新羅に対しては否定的な認識が、高句麗と渤海に対しては肯定的な認識が強調され、高麗は新羅ではなく高句麗を継承したと明示される。このことから学生たちが韓国に最も大きな影響を及ぼした古代国家として高句麗をあげる原因についても推測することができた。

もちろん、学生たちの歴史意識形成にはドラマ・政府広報・大衆歴史書や、インターネットを含む多様な言論活動の影響を受けていることであろう。しかしこうした多様な外部要因に接したとき、それらを受容する土台は、小・中・高の歴史学習を通じて築かれたものと考えられる。

筆者は、教科書を基本教材とはしながらも、授業時間を通じて多様な話題を持続的に提供することで、学生たちの意識がある程度は変化するものと期待していた。そのためアンケートにおいても、筆者の授業を聴いた2年生と高校国史を未学習の1年生との間に回答の差異が現れることを期待していた。しかしアンケート結果から確認できたのは、その差異は小さく、ほぼ無いとさえ言える事実であった。現在の国定教科書体制下で韓国史を学んだ学生たちの意識が、いかに強固に形成されているかが知られるであろう。こうして形成された学生たちの考えは、容易には変化しないであろうという事実もまた、アンケート結果を通じて知ることができた。

最後にアンケートの反省点として、学生たちに自身の姓氏起源について問う項目、および自身の歴史意識に最も大きな影響を与えたものについて問う項目を含めるべきであった。また小学6年生や中学新入生を対象に含むことができたならば、学生たちの意識形成とそ

の変化過程を体系的に知ることができたであろう。そのことにより、学生たちの歴史意識形成における国定歴史教科書が及ぼす影響も、より明確になったものと惜まれる。

注

- ¹ 李基東「起源研究の流れ」『韓国史市民講座』32、2003、25～26頁。
- ² 李弘揆「遺伝子から探る韓民族の根」『韓国史市民講座』32、36頁。
- ³ 李鮮馥「化石人骨研究と韓民族の起源」『韓国史市民講座』32、66頁。
- ⁴ 安承模「考古学からみた韓民族の系統」『韓国史市民講座』32、80頁。
- ⁵ 2007年8月24日に法務部は、「滞留外国人100万名突破」という題目の報道資料を発表した。この資料によると、2007年8月24日現在で、短期滞留外国人を含めた滞留外国人は100万254名で、史上初めて100万名を突破した。これにより滞留外国人は住民登録人口4,913万名の2%を占め、2006年7月（86万5,889名）より15%増加するなど、韓国社会の多人種・多文化社会への変化が急速に進展している。また結婚移民者は、2002年の3万4,710名から2007年現在の10万4,749名に、わずか5年の間に3倍以上増加しており、永住権者は、2002年の6,022名から2007年現在の1万5,567名に、約2.5倍増加するなど、定住外国人の大幅な増加に伴い、移民者の社会統合政策の重要性が浮上している。地域別の外国人居住状況を見ると、京畿（30%）、ソウル（28.5%）、仁川（6%）、慶南（5.8%）、慶北（4.6%）、忠南（4.1%）、忠北（2.8%）などで、ソウル・京畿・仁川に約64.5%が居住しており、首都圏に集中していることがわかる。※定住資格者（居住・永住資格者）数：'02年57,478名→'07年現在129,679名
- ⁶ 新羅の及ぼした影響が肯定的なものか否定的

なものかについて、2007年1学期期末考査で出題された論述形式問題に対する学生の解答が参考になるので紹介したい。試験問題は金春秋の三国統一過程について、検事の立場から金春秋の有罪根拠を提示するか、弁護士の立場から金春秋の無罪を立証せよ、というものであった。学生293名の解答中、有罪は84名(28.7%)、無罪は149名(50.9%)、その他・無回答が60名(20.5%)であった。有罪を宣告した理由のほとんどは、金春秋が外勢を利用して同じ民族である高句麗と百済を滅亡させた上に、新羅の統一が韓半島以南の部分的統一に留まったため、とするものであった。

- ⁷ 民族主義についての研究は、民族概念をどのように設定するかによって、その方向性を異にする。現在の理論水準では、民族概念についての議論は大きく2つに分けられる。民族の永続的性格を強調する「原初論」は、人種の共同体の永続性に注目し、民族主義は種族・祖先・宗教・言語・領土という、原初的紐帯を基盤とすると主張する。一方、民族を近代化の副産物とみなす「道具論」は、民族主義とは決して永遠の実態などではなく、近代化と都市化という特定の歴史的潮流の中から発現したイデオロギーとみなし、その歴史性を強調する。この問題は、民族主義に対する主観主義的観点と客観主義的観点との間の葛藤の延長線上にある(林志弦『民族主義は反逆だ』ソナム、1999、21~26頁)。
- ⁸ 国史編纂委員会・国定図書編纂委員会、中学校『国史』教育科学技術部、2009。
- ⁹ 国史編纂委員会・国定図書編纂委員会、高等学校『国史』教育科学技術部、2009。
- ¹⁰ 金漢宗『歴史教育課程と教科書研究』ソニン、2006、41~43頁。
- ¹¹ 請願書で『国史』の改正すべき点として指摘された事項は、次のとおりである。A) 檀君と箕子は実在人物である。B) 檀君と箕子の領土は中国北京までであった。C) 王儉城は中国遼寧省にあった。D) 楽浪郡などの漢四郡は、中国北京地

方にあった。E) 百済は3~7世紀にかけて、北京から上海に至る中国東岸を統治していた。F) 新羅の最初の領土は東部満州で、統一新羅の国境は一時北京にあった。G) 高句麗・百済・新羅、特に百済の人々が日本文化を築いた(尹種榮『国史教科書の波動』ヘアン、1999、22頁)。

- ¹² 韓国教員大学校・国定図書編纂委員会、初等学校『社会6-1』教育科学技術部、2009。
- ¹³ 李鮮馥、前掲論文、68頁。
- ¹⁴ ちなみに、中学・高校の『国史』が渤海を含めた「南北朝時代」という用語を使用するのであれば、「統一新羅」という用語は矛盾するため、今後は使用を避けるべきではなかろうか。
- ¹⁵ 「姓は出生の血統を示したり、ひとつの血統を継ぐ族の称号である。姓氏とは、一定の人物を始祖として代々つながる単系血縁集団のひとつの名称である。よって姓氏は、族的觀念の表現と見ることもできるという点で、結局は族の問題と直に関連するものであり、古代に遡るにつれ、その関連性はより深まる。後代の姓氏は漢字式表記で名の前に付けられ、族系を表す同系血縁集団の名称を指し、これはまさに中国式の出自律の意味を内包している。姓と氏とは、歴史上、ときにはセットで、ときには各々独立して用いられた。本貫とともに使用することで、血縁関係のない同姓と区分される」(李樹健『韓国の姓氏と族譜』ソウル大出版部、2003、71頁)。
- ¹⁶ 李樹健、前掲書、333~334頁。「当時、相当な数の無姓人が新たに姓を持つようになり、そこでは様々な戯画劇が起こったという。ある地方では、無姓者に本人の希望によって戸籍書記や警察が勝手に姓を付けてやったと言い、奴婢の場合には主人の姓に従うこともあった。また周囲に金・李・朴氏が多いところでは、そうした大姓を模倣して姓を付けたため、従来の大姓名門はその数がさらに増加していった。たとえば全州出身者は李氏、慶州地方出身者は金氏や崔氏と言うように、出身地の大姓や門閥を真似て自身の姓とする場合が多かった。現代の稀姓・僻貫の中

には、当時の警察が戸口調査をした時や、戸籍担当書記が戸籍を記載する際に、漢字を誤記したことに由来するものも少なくない」(同書334頁)。

¹⁷ 統計庁「2000人口住宅総調査 姓氏および本貫集計結果」統計庁人口調査課、2003。

¹⁸ 統計庁、前掲資料、9頁。

¹⁹ 李樹健、前掲書、96～97頁。

²⁰ 統計庁、前掲資料、〈附録3〉1,000名以上の姓氏本貫別の世帯数および人口。

²¹ 合本した高氏は、桂城・高峰・金花・潭陽・安東・延安・沃溝・龍潭・宜寧・長興・濟州・清州・会寧・横城など。

²² 『濟州高氏大同譜』、および濟州高氏ホームページ (<http://www.jejugo.co.kr>) 参照。

²³ 統計庁、前掲資料、〈附録3〉。

²⁴ 歴史書に登場する高句麗人の姓氏は、表3で扱った15よりも多いであろう。しかしここでは、李樹健の著書で示される15姓氏のみを調査対象とした。

²⁵ 伽耶を併合する過程で、金官国の仇亥(仇衡または仇衝)王が新羅に降伏し、彼とその息子たちは新羅の支配勢力として編入された。仇亥の曾孫である金庾信は、新たに編入された支配勢力の中でずばぬけてその頭角を現した。ところで仇亥の一族は、すでにその5代祖から新羅女性との婚姻関係を結んで来ており、血縁的には早くから新羅の外孫であった。彼らは新羅の最高支配勢力と血縁的につながっていたので、無理なく新羅の支配勢力に入ることができたのである(李鐘旭『新羅の歴史』1、キムヨンサ、2002、280頁)。「15歳の庾信公は、舒玄角干の息子である。母は万明夫人で、すなわち万呼太後の娘である。父は肅訖宗で、立宗葛文王の息子である」(金大問著、李鐘旭解題『対訳 花郎世記』ソナム、2005、235頁)。

²⁶ 統計庁、前掲資料、〈附録3〉。

²⁷ 統計庁、前掲資料、13頁。

²⁸ 韓国学中央研究院ホームページ (<http://www.aks.ac.kr/aks/Default.aspx>)、「姓

氏と本貫」の項。

²⁹ 宋俊浩『朝鮮社会史研究』一潮閣、1995、101～102頁。「新羅王室系である朴氏や金氏が、全国各地に分散することになった経緯に関しては、いくつかの説明がなされてきた。新羅王室が政策として王子・王孫を分封の形式で国内の各要地に送ったとする説、または王子・王孫が中央での政乱を避け自ら進んで、あるいは流配されてやむを得ず地方に下ったとする説などがある。また新羅が滅んだ後の事ではあるが、高麗太祖王建が彼ら新羅王族たちを全国的な規模で各地に「分処」したとの伝承が事実であれば、それもまた分散の歴史を裏付けるひとつの説明になるであろう」(同書、102頁)。

³⁰ 宋俊浩、前掲書、104～105頁。

³¹ 『清州韓氏世譜』によれば、箕子の第48代孫に友諒・友誠・友平の3兄弟がいたが、彼らがそれぞれ鮮于氏・奇氏・韓氏の元祖になったとする。また徐氏の都始祖である利川徐氏の始祖は新羅人の神逸であるが、彼も箕子朝鮮最後の王の後裔であるとしている(清州韓氏中央宗親会ホームページ<http://www.cheongjuhan.net>)。

³² 統計庁、前掲資料、〈附録3〉。

³³ 『萬姓大同譜』では、扶餘徐氏の始祖を百濟義慈王の太子である扶餘隆とする。百濟滅亡後に唐に入り、唐の高宗から徐氏の姓を受けたとし、その後裔である存が中始祖、秀孫(記者注:一般には扶餘徐氏の始祖とされる)はその11代孫と記録されている。

³⁴ これと関連して、李鮮馥の次のような指摘がある。「『5000年単一民族』が科学的・歴史的な事実ではないと言うと、激昂する人々が周囲には多い。しかし各種資料が明示するように、われわれの姓氏の中には歴史時代を通して中国や日本・ベトナムをはじめ遠近各国から帰化した人々を祖先とする事例がひとつやふたつではない。もしわれわれが『5000年単一民族』を額面どおりに信じるのならば、姓氏の祖先がもともと韓半島にいなかったことが明らかな数多くの現

代韓国人たちを、今後は韓国人とみなしてはならないだろう」(李鮮馥、前掲論文、64～65頁)。

³⁵ 高句麗・百濟・新羅の中で、どの国の歴史的遺産を統一後の新羅が受け継いだであろうか。ここでひとつ明らかにしておくべきなのは、他にもなく新羅が高句麗と百濟を征服したという事実である。征服国であった新羅が、被征服国である高句麗と百濟の歴史的遺産を受け継ぐ義務はなかった点を考慮する必要がある。統一後の新羅は征服者の権利を行使して高句麗と百濟の数多くの遺産を抹殺し、三国時代新羅の歴史的遺産を受け継いだことは事実である。その過程でかつての高句麗と百濟の支配勢力たちは新羅骨品制の下級身分として編成され、時間の経過とともに新羅社会に溶け込んでしまったのである(李鐘旭「科学派がつくった『民族史』から我々をつくった『韓国史』へ」『韓国古代史探究』創刊号、2009、11頁)。

³⁶ これと関連して、李鮮馥の次のような指摘に注目する必要がある。「われわれはよく、われわれ自身を檀君の子孫と称し、5000年の悠久な歴史をもつ単一民族であると称している。この言葉を額面どおり受け入れれば、韓民族は5000年前にひとつの民族集団としてその実体が完成され、そのとき完成された実体に変化することなく、そのまま現在まで続いたという意味になる。しかしこの言葉は、われわれの歴史意識と民族意識の鼓吹に必要な教育的手段にはなるであろうが、客観的証拠に立脚した科学的で歴史的な事実にはなりえない」(李鮮馥、前掲論文、64頁)。

解説

本稿は、『韓国古代史探究』第5集(韓国古代史探究学会、2010年)に発表された金相勲氏の論文を日本語に翻訳したものである。

本論文の翻訳を企図したのは、韓国の現在の歴史教育や歴史認識を知る上で、きわめて興味深い内容を含んでいる、と考えたためである。

著者は、自身の勤務校である韓国・ソウル特別市の崇文高等学校の生徒を対象に、「韓国人の起源」についてのアンケート調査を行った。その結果、高校生の多くが、韓国人の祖先を「壇君」(古朝鮮の建国者)と考え、韓国に最も大きな影響を与えた古代国家は高句麗であると考えていることが判明する。

では、なぜ新羅でも百濟でもなく、高句麗が最も大きな影響を与えた古代国家だと考えられたのか。7世紀後半に古代の三国(高句麗・百濟・新羅)を統一した国家は新羅であり、その意味では、新羅こそが最も影響を与えた国家と考えてもよさそうなものである。

だが中学校や高等学校の国定教科書である『国史』では、新羅の三国統一は「わが民族」を包括することができなかった、いわば部分的統一にすぎず、11世紀に成立した高麗こそが、実質的に民族統一を成し遂げた最初の王朝と評価している。そして高麗は、高句麗、そしてその後裔の渤海を継承した王朝として叙述されているのである。最近では三国統一後の時代呼称を、「統一新羅時代」ではなく、渤海と新羅が並存した「南北朝時代」とすることが一般化しつつあり、高句麗やその後裔と考えられている渤海を、自国の歴史の中で積極的に位置づけていこうとする姿勢が顕著である。

このことから著者は、『国史』にみえる高句麗－渤海－高麗とつながる歴史叙述構成が、中高生たちの歴史認識に大きな影響を与えたのだろう、と考えたのである。

ではなぜ、高句麗と渤海と高麗とをつなげる歴史叙述を、歴史教科書である『国史』は重視したのだろうか。著者は明確にはふれていないが、その背景には、高句麗王権の性格をめぐる、韓国側と中国側の「歴史紛争」と

もいべき対立の構図があるように思う（宋基豪『東アジアの歴史紛争』ソル出版社（韓国）、2007年）。高句麗や渤海を中国の地方政権の1つととらえる中国側の研究の立場と、これを韓民族によって建国された独立の国家とみなす韓国側の研究の立場の間には、深い溝が横たわっており、領土問題などの現実の政治的課題とも密接にからんで、複雑な様相を呈している。こうした複雑な問題が、韓国において高句麗の存在を強調させる言説につながっていることは、否定できないだろう。

本論文は、アンケート調査の手法や、姓氏統計を用いた考察部分において、なお検討を要する部分も少なくないが、現行の歴史教科書の丹念な読解を通じて、韓国の歴史教育や歴史認識の現状をあぶり出した点において、大きな意味を持つ。

たとえば現行の高等学校『国史』では、「わが民族は古くからひとつの民族単位を形成し、農耕生活を基盤とした独自の文化を築いた」と叙述している。これはいわば「単一民族史観」であり、「農業中心史観」である。

これを、卑近な例だが日本史の分野を例にとって考えてみると、中世史家の網野善彦氏が、列島社会の多様な地域性を重視し、さらに「水田中心史観」に疑義を呈して非農業民の存在にまなざしを向けたことは、よく知られている（たとえば、『日本の歴史00 「日本」とは何か』講談社、2000年など）。また、かつて「日本人」の中に根強く存在した「単一民族神話」が、敗戦後に強調されるようになった言説であったことを小熊英二氏は指摘している（小熊英二『単一民族神話の起源』新曜社、1995年）。こう

した、いわば「日本史の相対化」の作業を経て、現在では日本列島の歴史を「農耕生活を基盤とした単一民族の歴史」と、素朴にとらえることは、まずなくなったとみてよいだろう。

では、韓国ではどうだろうか。著者はこの点を明確に主張しているわけではないが、注36において「われわれはよく、われわれ自身を檀君の子孫と称し、5000年の悠久な歴史をもつ単一民族であると称している。この言葉を額面どおり受け入れれば、韓民族は5000年前にひとつの民族集団としてその実体が完成され、そのとき完成された実体に変化することなく、そのまま現在まで続いたという意味になろう。しかしこの言葉は、われわれの歴史意識と民族意識の鼓吹に必要な教育的手段にはなるであろうが、客観的証拠に立脚した科学的で歴史的な事実にはなりえない」（李鮮馥「化石人骨研究と韓民族の起源」『韓国市民講座』）という主張を引用していることからわかるように、これまで「農耕社会を基盤とする単一民族による悠久の歴史」とみなしてきた歴史認識を、相対化する必要があることを示唆しているように思う。

自国の歴史研究で必要なことは、自国の歴史を相対化することである。本論文は、中学・高等学校における歴史教育、そして中・高校生の歴史認識を明らかにすることを通じて、自国の歴史の相対化を試みたものと評価したい。

最後になったが、翻訳にあたり、著者の金相勲氏、韓国・国史編纂委員会の田美姫氏、東京大学史料編纂所の田島公氏にご助力いただいた。記してお礼申し上げる。（三上 喜孝）